

思春期から成人期へーわが家の体験ー

2021. 11. 21 仙台定例会

藤坂龍司

私の娘、綾は現在、26歳。もう立派な大人である。8年前に養護学校高等部を卒業して、学校生活を終え、現在は、「木の根学園」という生活介護施設で、ケーキ班に属し、毎日クッキーを作っている。

1. 楽しかった学校生活（小学校～中学校）

綾は、小学校から中学校にかけての9年間（その前の幼稚園を含めると11年間）、母親の付添い付きで、普通学級で学んだ。

綾は社会性が乏しく、会話はできないし、一緒に遊ぶのも難しい。学業は、算数と漢字くらいはついていけるが、あとは難しかった。しかしそれでも、毎日うれしそうに通っていた。

勉強は家に帰ってから、母親が一日三時間くらい教えていた。中学の定期試験の前は2, 3週間前からたたき込んだ。テスト当日もそばについているが、手は出さないようにした。それでなんとか、中3まで、平均点程度は取れていた。

小4の時はいじめっこグループにバイキン扱いされた。しかし本人はそれも気づいていなかった。傷つくのは親だけ。

本人は、毎年、教科書が変わり、学年が進むことに生きがいを感じていたようだ。社会性が低いながら、「みんなと同じことをしたい」という気持ちは強く、体育の時間にはみんなの後を追って校庭に走り、皆が準備体操を始めると、それを懸命に模倣する姿があった。

2. 養護学校高等部へ

中学の後は高校。本人は、勝手に近くの普通高校を自分の進学先と思い込み、そこの制服を着ることを楽しみにしていたようだ。

しかし知的能力（小6のときDQ50台）の面からも、社会性の面からも、通常の高校は無理と思われた。将来の一般就労は困難であり、いわゆる「作業所」に行かなければならない。それには、そういう福祉関係の進路に詳しい養護学校（特別支援学校）に移る必要があった。やむなく、最寄りの県立養護学校高等部に進んだ。それとともに、妻は付添いをやめた。

入学式は衝撃的だった。これまでの入学式と違って、参列した学生の間から、動物的なうなり声が聞こえてくるのが異様だった。しかし実際に授業が始まってみると、むしろ娘よりも軽度の子が多いと感じるようになった。

養護学校でもう一つ、娘がかわいそうだったのは、教科書がなかったこと。あるはずなのだが、学校はそれを配ろうとしなかった。生徒のレベルに開きがありすぎるので、能力別に分けて、プリント学習をするらしかった。娘は「教科書下さい」と先生に言いに行ったそうだが、その望みはかなえられなかった。

それでも、養護学校はまだ「学校」であり、一年経てば学年が上がり、クラスや担任が変わる。娘はそれを楽しんでいた。

高校というと、いわゆる「思春期」だが、自閉傾向の強い娘は、異性を好きになることもなく、ただ、身体的にいわゆる二次性徴が来て、生理の処理の問題が加わっただけである。ナプキンの付け方は、妻が教えた。とくに精神的に不安定になることもなかった。

3. 卒業後の進路

養護学校高等部に入ると、一年生の時から、親は作業所の見学に行くように言われる。どこかと早くつながりをつけておいて、卒業後の進路を確保することが求められるのだ。

養護学校の子どもたちの進路には、上から、一般企業への就労、企業への福祉就労、就労A型作業所、就労B型作業所などがある。就労A型は、一般企業への就労を目指す訓練機関だが、B型は特に上を目指さない。「ずっと作業所」である。

養護学校2年の時、A型作業所の実習に参加したが、レベルが高すぎた。就労者たちは、ミーティングの時に、自分の今日のシフトが何かを言える必要があった。娘には無理だった。

その後、妻はB型の作業所をいくつか見学したが、どれも暗そうだったり（シイタケ栽培の作業所）、作業がきつそうだったりした。職員の言い方が乱暴だという話も聞いた。そもそも朝から夕方まで作業ばかり、という生活に、娘は長くは耐えられそうになかった。

そこで妻はB型の一つ下の、生活介護施設（C型？）を進路先を選ぶことにした。ちょうど、地元が運営している施設が民間委託に移行し、それをきっかけに定員を増やすことになった。元々そこは狭き門だったが、娘はタイミングよく入ることができた。

そこは「木の根学園」と言って、学校のような名前がついているのもよかった。妻は、「ここも学校だ」と娘に思い込ませ、娘もそれを信じた。いまはどうかしらないが、6年目くらいまでは、「綾は何年生？」と聞くと「6年生」と答えていたので、信じていたのだろう。

4. 木の根学園での生活

木の根学園は、B型作業所と違って、作業時間が短く、リクリエーション活動もあるのがよかった。娘はいくつかの作業を経験した後、能力を買われて、ケーキ班に勤めることになった。

ケーキ班はほかの作業班と違って、アクリル板で仕切られた無菌室のようなところで作業する。部屋の中では、衛生面から、エプロン、帽子、マスクの着用が厳しく指導され、髪の毛が帽子からはみ出ないように髪の毛をしっかりと帽子の中に入れてはいけない。娘に耐えられるかな、と危惧したが、意外と大丈夫だったようだ。

それでも、最初の2、3年は、皿洗いばかりをさせられ、泣くこともあったようだ。卵割りとか、生地練りのような面白そうな作業は、先輩利用者が独占していたのだ。

しかし4年目くらいから、綾も徐々に、卵割りや生地練り、生地切りなどの大事な仕事を任せられるようになった。それはやはりやりがいがあるらしく、娘の情緒もようやく安定してきた。

娘は数を数えたり、長さや重さを量るのは得意なので、クッキーを決まった数だけ袋に入れたり、リボンを決まった長さに切る、小麦粉を決まった重さだけ量る、などの作業に重宝されていた。それが娘の誇りでもあり、私たちの誇りでもある。

ケーキ班は、時々、木の根のクッキーをおいてくれるコンビニやSAなどに納品に出かけたり、そこで売り子をすることもある。そういう時、娘は「いらっしやいませ」の呼び込みや、お金のやり取りもできるので、「稼ぎ頭」とほめられることもある。これも私たち親子にとって誇らしいことだ。

<いつ終わるの？>

ただ、木の根の生活は、学校と違って、毎年変わらない。木の根を学校と信じている娘は、「木の根は何年で終わるの？」と聞くようになった。娘はおそらく 50 代か 60 代まで木の根にいるはずなので、「50 年だよ」と答えた。

そうしたら、「木の根学園の次は何ですか」と聞いてきたので、「老人ホームだよ」と答えた。以来、娘は、木の根に 50 年いて、そのあとは老人ホームに行くと信じている。老人ホームで親子丼やうどんを食べるのが楽しみらしい。

5. 家庭での生活

木の根ではそれなりに充実した毎日を送っている娘だが、家では特にすることがないので、暇な日々を過ごしている。

テレビやアニメを楽しめればよいのだが、ストーリーもギャクも理解できない。絵や工作などの創作活動をしてくれるとよいのだが、そういう気持ちは湧いてこないようだ（絵や工作をさせると部屋が汚れるので、妻がさせない、という面もある）。

ただ、それでは暇で平気か、というとそうではなく、退屈になると、機嫌が悪くなって泣き出したり、怒り出したりする。あるいは皮膚をむしるなどの自己刺激に耽る。だから私たちは、娘に暇な時間を作らないよう、いつも気を付けている。

<娘の帰宅後スケジュール>

3 時半ごろ帰宅。シャワー、おやつ。数学、英語の復習、ピアノの練習（妻と）

夕方、妻と散歩に出かける。帰宅後、今度は夕ご飯のおかずを買いにコープへ。

19 時半過ぎ、私が帰宅。20 時、夕食。

20 時 45 分、私がピアノを教える。

21 : 10、お手玉腹筋

21 : 20、氷を食べる

21 : 40、動画を見る（NETFLIX）

22 : 20、妻と入浴

22 : 50、再び動画を見るか、私の携帯で You Tube の音楽を聴く。我々はニュースを見る。

23 : 30、布団を敷いて寝る準備。

23 : 40、私と娘は寝床で歌を歌って、妻を待つ。

23 : 50、妻がやってきて、三人寝床に入る。しかし娘はすぐには眠れない。退屈なので、眠い家内を起こしたり、泣いたりして、家内に怒られる。

1 : 00 頃、ようやく眠りにつき、わが家に静寂が訪れる。

<将来の夢がない>

このように、寝る前になると、娘はよく不安定になる。不安定になると、「〇〇病院に行って、注射をする」と言い始める。注射にあこがれているのだ。一つの病院だけではなく、近所の病院の名前を片っ端から挙げ始める。「福山病院に行って、注射をする。注射をしてから、明石公園をお散歩する。お散歩したらお家に帰る。次は久保病院。久保病院に行って注射をしてから、明石のピオーレに行って、ラーメンを食べる。次は神明病院。神明病院に行ってから、アスパア明石で〇〇を食べる・・・」と延々と続く。

この背景には、娘が日頃感じている、生活への空しさがあるのではないか、と考えている。

私たちは普通、何か、目標を持って生きている。娘の年だったら、やがて誰か素敵な人と恋をして、結婚をして、子どもを作って...といった人生設計を描いているだろう。だからこそ、日々の単調さにも耐えられる。

しかし娘には何もない。人生の目標もなければ、夢もない。楽しみは食べることと外出くらいだ。だから、夜になって暇になると、泣いたり、怒ったり、あるいは病的な言葉を繰り返したりするのだと思う。

それを私たち親はどうすることもできない。せめて週末に外出したり、毎日もなるべくいろんなことをさせるようにしている。しかしそれでは、娘の空虚さは埋められないのである。